３私の花鳥賦（加藤幸子）

―雪が降る冬の間は超満員になる我が家の庭のえさ台も、春になると客足が遠ざかる。ところが……

ある朝、庭が急にスズメの声でいっぱいになった。見るとえさ台の上には、（　Ａ　）見なれた茶色の坊主頭が並んでいるが、やかましいのは隣の屋根で、数羽の巣立ちびながうずくまり、翼を小刻みに震わせながら、〈ピーピーチーチー〉鳴きたてている。

羽毛をふくらませているので親より太ってみえるが、全体に色が淡く、くちばしの根元が黄色くて動作も子どもっぽい。親に向かって「ここにいるよ、お腹のすいたボクはここだよ。」と合図をしているのだろうが、それはそのままわが家と付近の猫たちへの存在証明にもなる。①私が心配のあまり、ガラス戸にはりついてしまうのは、そのせいである。親スズメは自分の食べるのもそこそこに、細かいパンをくわえて、最も大仰な身震いをして騒いでいるひなのところに飛んでいき、口移しにそれを与える。ひなのばたばたは少しおさまる。えさ台に引き返した親は今度はもっと激しく身震いしている別のひなにえさを運ぶ。数回えさ台と隣家の屋根を往復しているうちに、親が（　Ｂ　）えさの運搬作業を放棄してしまうことがある。

「そうだわ、うちの子たちはもう飛べるんだったわ。」と気づいたのかどうか、ひなたちの哀願にも②耳をかさずに食ベはじめる。

子スズメのほうは急につれなくなった親の関心を引こうと必死である。ない飛び方で屋根から金網のフェンスヘ、そこからえさ台へ、ジャンプを試みる。③息をつめて見ていた私もほっとする。新しい世界に飛びたった子スズメたちが、初めて自力による採餌を始めるだろうと思って……。あきれたことには、ひなたちはふたたび身を震わせはじめる。えさ台のパンを足で踏みしだきながら、自分がどんなに空腹で哀れな子どもであるかを親に認めさせようと黄色いくちばしを開いてみせる。親スズメは愛の衝動に駆られて、思わず足もとのパン屑の一かけを拾って子のくちばしに押しこむ場面もあるが、知らん顔をしているときが多い。そのうちに子スズメの中でも兄貴分の一羽が、自分の鼻先にあるパン屑をちょんとつまんでみる。

「おいしいぞ！」もう一度ちょん。

「なんだ。［　Ⅰ　］ってこんなに易しいことか。」ちょん。ちょん、ちょん。

私の目にはいつのまにか甘ったれの子スズメが消えて、ういういしい若いスズメが代わりに映る。（　Ｃ　）もっと幼いひなたちも、自分がいつまでも④子どもぶりをしていても少しも得にはならないことに気がつく。そして次々と巣立ちびなの全員が、大人のスズメ社会に溶けこんでいく。私のえさ台は（　Ｄ　）子スズメたちのおあつらえ向きの訓練の場なのであろう。今年も⑤スズメの〈成人式〉が終わるまでは、野鳥食堂の営業を続けるつもりである。

問１　（　）Ａ～Ｄに入ることばをそれぞれ次から選び、記号で答えよ。（同じことばは二度使わない。）

ア　ふいに　　イ　たぶん　　ウ　やがて　　エ　いつも

Ａ＝（　　　）　　Ｂ＝（　　　）　　Ｃ＝（　　　）　　Ｄ＝（　　　）

問２　――線部①について、どのようなことを「心配」しているのか。具体的に答えよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 〕

問３　――線部②とほぼ同じ意味になることばを文中から九字で抜き出して答えよ。

〔　　　　　 　　 　　〕

問４　――線部③について、「私」が「息をつめ」るのはなぜか。具体的に答えよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 〕

問５　［　］Ⅰに入る適当なことばを自分で考え、五字以上、一〇字以内で答えよ。

〔　　　　　 　　　 　　〕

問６　――線部④は「巣立ちびな」のどんな行為を指していったものか。具体的に書かれている連続する二文を文中から抜き出して、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問７　――線部⑤とはどんなことを意味するか、答えとなる一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

【解答】

問１　Ａ＝エ　Ｂ＝ア　Ｃ＝ウ　Ｄ＝イ

問２（例）ひなが（わが家と付近の）猫たちに襲われること。

問３　知らん顔をしている

問４（例）ひなが無事にえさ台まで飛べるか、心配だから。

問５（例）自分で食べる（６字）

問６　あきれたこ

問７　そして次々

ポイント

問２　鳴きたてれば、その存在をわが家と付近の猫たちに知らせることになり、危険が迫る。

問４　「息をつめる」は、息もできないくらい、緊張するときに使われる。覚束ないひなの飛び方を筆者ははらはらしながら見ている。